



Short ショートコメント

★★★★★

サンダカン八番娼館 望郷

1974年／日本映画

配給：東宝／121分

2025（令和7）年9月7日鑑賞

シネ・ヌーヴォ

Data 2025-8-6

監督：熊井啓

脚本：広沢栄、熊井啓

原作：山崎朋子『サンダカン八番娼館—底辺女性史序章』

出演：栗原小卷／高橋洋子／田中絹代／田中健／水の江滝子／水原英子／藤堂陽子

みどころ

ボルネオってどこにあるの？“からゆきさん”ってナニ？サンダカン八番娼館って一体ナニ？「望郷」というサブタイトルの意味は？

若者たちは全く知らないだろうが、本作は私が弁護士登録をした1974年のキネマ旬報の日本映画ベストテン第1位であり、田中絹代がベルリン国際映画祭で銀熊賞（女優賞）をゲットした名作だ。そんな本作を「シネ・ヌーヴォ 日本映画大回顧展」の「決定版！日本戦争映画史」で再度鑑賞できたことに感謝！

外国人問題や移民問題がやっと国政選挙の争点の一つになった今、若い人たちにも本作は必見！

———— * ————— * ————— * ————— * ————— * ————— * ————— * ————— * —————

◆「シネ・ヌーヴォ 日本映画大回顧展」の「決定版！日本の戦争映画史」で本作を鑑賞。本作が公開された1974年は、私が弁護士登録をした年。そんな忙しい時期に、何故本作を観たのか、私は全く覚えていないが、回想シーンから始まる本作を私はハッキリと覚えている。とりわけ、高橋洋子演じる北川サキが娼婦として、初めて巨大な体格と奇抜な風体の外国人の客をとるシーンは明確に覚えている。そんな本作を、私は『ひめゆりの塔』との2本セットで鑑賞。

◆チラシにおける本作の紹介は右のとおりだ。

◆ボルネオってどこにあるの？サンダカンってナニ？「からゆきさん」って一体ナニ？“サンダカン八番娼館”って本当にあったの？なぜ九州の天草の女たちが“から



ゆきさん”になったの？

そんなことが明らかになったのは、日本の女性の近代史を研究している三谷圭子（栗原小巻）が、旅行中の天草で偶然サキ（田中絹代）という老婆と知り合ったことがきっかけだったらしい。サキの家の前まで一緒に歩いた圭子は、誘われるままに粗末なサキの家中に入り、ひと休みしている最中に、ついつい“お昼寝”までしてしまったが・・・。

◆いくら日本の女性の近代史を研究するために、天草を取材のために訪れても、昔の“からゆきさん”たちの口は固く、何の収穫も得られなかつたのはむしろ当然。しかし、あの日のサキ宅訪問とあの日のお昼寝のおかげで（？）、サキから「息子の嫁だ」と近所の人に紹介された圭子が、電撃取材（長期泊り込み取材）の覚悟でサキの家を再び訪れる大歓迎！しかし、東京育ちの圭子が、息子ですら立ち寄らないほどのひどいあばら家で本当に長期滞在できるの？食事もひどいが、トイレもなく「外でやれ！誰も見ていないから。」と言われても・・・。

◆1980年代は、栗原小巻の女優としての絶頂期。本作にみる圭子の突撃取材の姿には頭が下がるが、何といっても、本作の“陰の主役”は老いたサキ役を演じた田中絹代だ。本作にみる、晩年の女優・田中絹代の圧巻の演技に注目！田中絹代さん、ベルリン国際映画祭銀熊賞（女優賞）の受賞おめでとう！その熱意は高橋洋子にも伝播したそうで、若き日のサキ役を演じた高橋洋子は本作で大ブレイク！

◆ちなみに、私の中国人の友人が2025年8月、マレーシアに1週間滞在した時、サンダカン八番娼館の廃墟も見学してきたとのことで、写メールを送ってきた。その詳細はわからないが、サンダカン八番娼館跡地にも行つたし、日本人墓地も見学したそうだ。本作では、商売繁盛中のサンダカン八番娼館と、廃墟になってしまったサンダカン八番娼館の両方がスクリーン上に登場するので、その姿に注目！その上で、友人から送ってきた写メールの雰囲気ともしっかりと対比したい。



2025（令和7）年9月8日記